# 平成 21 年度 海外研修報告書

日本リハビリテーション医学会 国際委員会 委員長　志波　直人
海外研修担当委員　花山　耕三

**三原　雅史**（特定医療法人大道会 森之宮病院）

参加会議名：15th Annual Meeting of Organization of Human Brain Mapping
開　催　地：米国，San Francisco
参 加 期 間：平成 21 年 6 月 18 日～ 23 日
発表演題名：Cortical network involved in the adaptation learning of reaching using 3-dimensional robotic rehabilitation system : A functional near-infrared spectroscopic study.
発表の成果：今回我々は，3 次元的な上肢動作における学習過程の脳活動変化を，3 次元ロボットリハビリテーションシステムと機能的近赤外分光法を組み合わせて測定し，上肢の 3 次元的指標追従課題の習熟に伴い，対側運動前野の経時的な活動上昇が見られることを明らかにした．より日常的な課題における脳機能測定方法として，今後リハビリテーション臨床においても応用が期待されると，大いに反響を呼んだ．

**山田　　深**（慶應義塾大学月が瀬リハビリテーションセンター）

参加会議名：5th World Congress of the International Society of Physical and Rehabilitation Medicine
開　催　地：Istanbul
参 加 期 間：平成 21 年 6 月 13 日～ 17 日
発表演題名：Functional outcomes of combined acute and rehabilitation stroke unit care
発表の成果：急性期 stroke unit におけるリハビリテーションアウトカムについて報告した．本研究は評価尺度として FIM を利用し，脳卒中の病型別に発症直後からの介入におけるスコアの変化を比較したものである．同じセッションの演題でも脳卒中急性期リハビリテーションのアウトカムについて，セルビアや中国からの報告がみられた．中国からの報告は mobile stroke unit を扱ったもので，患者をランダムに割り当てている点を興味深く感じた．わが国でも発症直後からのリハビリテーション介入は普及しつつあるが，世界の動向としても同様の潮流を肌で感じることができた．

**室谷　嘉一**（東北大学病院内部障害学分野）

参加会議名：5th World Congress of the International Society of Physical and Rehabilitation Medicine
開　催　地：Istanbul
参 加 期 間：平成 21 年 6 月 13 日～ 17 日
発表演題名：Impulse oscillometry as an easy and comfortable device for pulmonary function test
発表の成果：当教室が医学・工学連携および産学協同で研究開発したインパルスオシレーション（IO）法を用いた呼吸機能検査機器で，検査結果を 3 次元表示するモストグラフ（r）を使用した臨床研究を行った．結果，呼吸機能を客観的に評価し得る IO 法は，スパイロメトリーより非侵襲的であり容易な検査であることを明らかにした．また IO 法による呼吸機能検査の有用性について言及し，大きな反響を呼んだ．

**大沢　愛子**（埼玉医科大学国際医療センター）

参加会議名：5th World Congress of the International Society of Physical and Rehabilitation Medicine

開　催　地：Istanbul

参 加 期 間：平成 21 年 6 月 13 日～ 17 日

発表演題名：Cognitive decline and neuropsychological tests for patients with internal carotid artery stenosis

発表の成果：同じセッションにて高齢者の呼吸リハビリテーションや嚥下リハビリテーション，骨折予防，脳血管性認知症予防などの発表が行われ，成人病や慢性疾患，高齢者の廃用予防に関するリハビリテーションの重要性を再認識した．また，ポスターでも，多数の演題において，リハビリテーションが関わる分野は無限に広がっており，様々な分野の専門知識を得ることの必要性を痛感するとともに，他科の医療従事者と対等に渡り合える知識やリハビリテーション技術の蓄積が必要であると実感した．今後，この貴重な機会に得ることができた知識をもとに，よりよいチーム医療とリハビリテーション医療の発展に寄与できるよう，努力したい．

海外研修印象記はリハニュース 45 号（2010 年 4 月 15 日号発行）に掲載予定です．